

〈書評〉

近藤潤三著

『東ドイツ(DDR)の実像：独裁と抵抗』

石 井 聡

はじめに

東西ドイツが統一されて2010年で20年となった。本書は、著者近藤潤三氏が、その20年間にわたって取り組み続けてきた東ドイツ（Deutsche Demokratische Republik、DDR）に関する論考を一書にまとめたものである。DDR史に関する文献の量の多さは、ドイツではもはや「研究者も閉口するほど」（本書P.325）となっているが、対照的に我が国ではDDR史に本格的に取り組んだ著作は極めて少ない。著者は「あとがき」において、今後の「若手研究者の参入を期待」しているが、それを促す意味でも、DDRの実像を冷静かつ客観的に描いた本書の出版の意義は大きい。

以下では、まず内容を要約したうえで、本書の意義をまとめ、さらに評者から若干の問題提起をすることで、本書の内容を受けて今後のDDR研究において注目すべきと考えられる論点について浮き彫りにすることを目指したい。

I 本書の内容

序章「DDR研究の現在と本書の主題」において、著者はDDR研究の今日的意義として、3点を掲げる。第一に、旧東西ドイツ間でおお経済的格差や意識の差が残っていることや、社会主義統一党（SED）の後継党である左翼党が旧東地域で強い勢力を維持していることなどから、現在のドイツを語るうえでDDRの経験を見無視することはできないという点である。第二に、東西の分断は40年もの歴史を有しており、ドイツ現代史を学ぶうえでDDRを避けて通れないのは明らかだという点である。第三には、DDRの「支配の構造は、『支配

されつくした社会』という表現に見られるように、現代における支配の極限形態を示し、いわばその理念型を提示していると考えられる」がゆえに検討に値する対象だという点である。

ただ、この第三の点に関連して、著者は従来の研究史を整理しつつ慎重な姿勢を保っている。DDRを「支配されつくした社会」として「全体主義論」的に捉える研究傾向がある一方で、社会の自律性を重視しながら「全体主義論の分析上の限界」を論じ、「独裁」といった概念さえ使用しない傾向も他方に存在することが確認されるが、「DDRの支配体制を巡って様々な見方が提示されており、議論が錯綜しているのは明らか」だとする。そうした錯綜の原因の一つは、「十分な実証的研究を踏まえずに、あるいは特定の断面に関心を集中させながら、一気に全体の見取り図を描こうとする無理にある」として、実証的研究の蓄積の必要性を呼びかけるのである。

本書は、秘密警察（シュタージ）に重点的にメスを入れ、その犠牲者という生身の人間に即しつつ「DDRの暗部と呼ぶべき側面」を描くことを目指すものである。だが注意しておくべきは、「DDRの一切を暗色で塗りつぶすことは著者の意図するところではない」ともされている点である。「現在でもオースタルギー（旧DDR国民による旧体制への懐旧の念：評者）が語られるように、温もりのある人間関係や女性の自立をはじめとして、失業がないこと、物乞いやホームレスがいないこと、治安が良好なこと、社会保障が整備されていることなど、懐かしく記憶され、あるいは西ドイツより優れていたと評価されるような東ドイツのポジティブな側面が存在し、そこで暮らした普通の市民の脳裏にしっかりと刻み込まれているのは確かな事実だからである」。著者は、たとえば社会政策が経済合理性を欠いたことなど問題点に留意しつつも、「そうした事実を直視するところから、DDRに肯定面は存在せず、あるとすれば今日の不満を土壌にし、それを過去に投影して作り上げられた憂気楼や幻影だとする立場を本書ではとらない」と述べる。

また、国民の日常と体験が決して一様ではなかったことも確認される。たとえば本書の対象となるシュタージに関しても、「抑圧に晒されて不安の中で生

きた人々」と「ほとんど圧迫を感じないまま過ごした人々」が同時に存在していた（ヤグーシュによれば、前者がDDR市民の10%以下、後者が90%以上だったと推定される）のであって、「抑圧と抵抗という注目を浴びがちなドラマだけに視線を向けて、『権力と抑圧の語り口』に偏るのを避けるように心がけ」、「光の側面にも目を配りつつ、バランスに注意を払いながら検討」していくことが宣言されている。

以下では、シュタージの犠牲となったいくつかのパターンの人々から複数の事例を取り上げ、「事例の位置を見定める作業を繰り返」しながら、考察が進められていくことになる。

第1章「ベルリンの壁・ドイツ内部国境の越境者問題」は、1973年10月の命令書に、「逃亡を図る者がいたら警告なしでも発砲せよ」と記されていたという衝撃的な事実を指摘するところから始まる。「国境侵犯者の死は、DDRの汚辱と見做された国境突破の成功に比べれば許容可能な範囲にあったのである」。命令書は、国境警備兵全体に宛てたものではなく、その中に配置されたシュタージのメンバー宛のものであって、射殺にはシュタージが大きく関わっていた。犠牲者については、最少で270人、最大で1135人という各種数字が挙げられているが、この強固な国境は、一般市民の逃亡に対する恐れともつながり、DDRを安定化させたという面があることを確認しておく必要があると著者は言う。国境は「そこで斃れた市民の命を代償にし」、「DDRの不可欠な支柱になったのである」。

第2章「ベルリンの壁の犠牲者：最初と最後のケース」では、壁で犠牲となった最初と最後の青年について、その人となりや動機などを解明しつつ、犠牲者の生身の人間像に迫ろうとする。最初の犠牲者リトフィンは、壁が建設されて11日目に射殺された。彼は、西ベルリンの服飾店に勤務しており、CDUの非合法メンバーでもあったため、西への移住を計画していた。そこへ壁の建設が始まった。人生設計が狂った彼は、国境の運河から逃亡を図るが、銃撃が首に当たってしまう。最後の犠牲者となったのはギュフロイという青年であり、壁崩壊の9ヵ月前に射殺された。彼はエリート校で学んだが、国家人民軍将校

になることを拒否したため、出世の道から転落してしまう。給仕の職業訓練を受けるが、腐敗の横行や自分で物事を決められないことへの不満を洩らすようになる。運河を伝って脱出を試みたギュフロイであったが、心臓を撃ち抜かれ死亡した。

著者は、「東ドイツを出たいという市民の願望を蹂躪し、出国の実力行使に銃弾で応じる国家が不法でなかったとはいえない」と厳しく断罪し、また壁のおかげでDDRがようやく国家として安定し、ドイツ問題の重圧が軽減されたからこそ、ヨーロッパが安定しえたという事実も忘れてはならないと本章を結ぶ。

第3章「1950年代初期のDDRの『政治犯』」で対象とされる人々は、体制に対して表立った反対をした者ではなく、反対派と疑われて逮捕・処刑された人物である。「政治犯」には、実際に抵抗した者と、単に反対派と疑われただけの者とがあり、大きなグレーゾーンが存在した。そこに的を絞ることで、普通の市民の目に映った抑圧の具体的構造を浮かび上がらせることができるのではないかというのが著者の考えである。

1人目の「政治犯」は、1953年11月に逮捕されたツァーンである。西のベルリン自由大学の学生であった彼は、東側に残る家族を支援するネットワークで働いていたが、突然捕らえられた。睡眠略奪という方法で取り調べを受けるなどしたのち、彼は10年間労働収容所で刑に服することになる。その後国外追放の処分を受けるが、反対派を西ドイツへ追放することで国内の安定を図るという措置の先例となった。次に、ムラスとヴィルヘルムのケースが取り上げられる。彼らは、政治的理由から殺人を犯したとして52年9月に処刑された。事の発端は、飲み会の最中にSEDの活動家が突然死したが（心臓病だとされる）、「ファシストの仕業」である政治的殺人だという発表がなされたことであった。シュタージによって間もなく2人が逮捕された。彼らが容疑者にされたのは、反社会主義者でもファシストでもあったわけではなく、村の幹部から疎まれていたという事情があったからだという。

著者は、明確に社会主義に反対する行動だけでなく、その疑いを招くこと自

体が厳罰に直結するということが、これらの事件を通じて人々の脳裏に刻まれたという点を重要視する。こうして人々の自己抑制が生まれ、体制が安定することにつながったのである。市民は上辺では体制に順応しつつ、私的領域に閉じこもって暮らすようになった。これが、ガウスの命名した「ニッチ社会」であるが、著者は「無数に存在した小さくて目につかないくぼみに喩えるのが適切」だとして「くぼみのある社会」と訳しつつ、この理解を支持する。その理由は、「普通の市民にとってはDDRには自分の身の安全を確保する術がなかった」からだとする。ただし、「私生活への逃避が社会の基調となったからといって、人々があらゆる面で窒息状態にあったかのように考えるならば行き過ぎ」であり、物不足の下での相互助け合いなど、「競争と自助が優先される西ドイツでは経験できない人間的な温もり」が存在していたことも同時に確認される。

第4章「DDR初期の抵抗運動」が扱うのは、実際に反体制運動を行った3つのグループである。1946年のSED結党以降、DDR地域では「SEDの指導的役割」が確立され、かつての社会民主党員など5千人以上が逮捕され、数百人が命を落としたとされる。そうしたなかで抗議に立ち上がる市民が出現したが、とくに中心となったのが上級学校の生徒たちであった。抵抗グループの一つがアルテンブルク・サークルである。テューリンゲンの小都市の上級学校に形成されたサークルで、党への権力集中を危惧する教師と生徒の集まりであった。ビラや西から持ちこんだパンフレットの配布、ポスターの貼付、ラジオでの訴えなどが活動の中心であったが、50年3月に関係者が逮捕された。簡易な裁判の後、4人に銃殺刑の判決が言い渡される。

このほかザクセンやイエナ近郊のサークルといった50年代の事例について詳細に描かれているが、これら事例は、「民主主義的正統性を欠落したDDRの支配構造の問題点を浮かび上がらせるだけでなく、今日からみると、裁判の公正さの欠如、検察と裁判官の癒着、シュタージと独裁政党の介入などDDRにおける司法の実態に迫る手掛かりを提供している」との評価が与えられている。

第5章「1950年代のシュタージ拉致・殺人事件」では、まず初めに、シュタージの任務遂行の仕方がDDR40年間の「初期には暴力的な面が目立ったが」、

「後半期になると国際世論を刺激することを警戒してソフトな方法に重心が移った」という変化に注目することが必要である点が指摘される。

本章の対象も反体制の活動家であるが、彼らはDDRから逃亡し、西ベルリンで反体制運動を行っていた人物である。このうちリンゼは、商工会議所に勤務していた人物であるが、ナチに関する証言を知人にされるなどして西ベルリンへ逃亡する。彼は、DDRにおける人権侵害などを調べる目的を持つ自由法律家調査委員会に協力したが、この結果「国家の敵」とされる。シュタージの手によって拉致され、処刑されてしまう。もう一人のピアレクは、早くから共産主義者だった。40年代末にはSEDの州指導部書記から人民警察特殊部隊の政治的訓練を担当する責任者へと出世していく。だが、「上位の者に対しても遠慮会釈なく自分の信条や意見をぶつける尊大とも映る彼の性格」から解任されてしまう。出世の道が閉ざされたピアレクは西へ逃亡した。DDR内のSED反対派を支援した彼は、西ベルリンからシュタージに拉致され即座に死亡したとされている。

本章のまとめにあたって著者は、近年のドイツでシュタージの犯罪を相対化しようとする「シュタージの復権」とも呼べる現象が目立つなかで、「シュタージの暗黒を記憶にとどめておく意義は少しも減じていない」と強調する。そしてまったく異なる経歴や活動歴を有する彼ら2人の拉致・処刑からは、「DDRが許容し、受け入れることのできる政治的主張やイデオロギーの範囲が極めて狭小だったこと」、1961年のベルリンの壁建設以降の安定期と異なり、国家としてのDDRの存立に対する危機感が強かったため50年代にはとくに強硬手段が発動されていたことなどが確認される。

第6章「DDR最後の『政治犯』」は、DDR末期に脱出を試みた「DDR最後の虜囚」に対象を絞って脱出への経緯を追跡し、かつシュタージの末期の姿も同時に描いている。人民所有小売業本部の副総支配人だったヘードリッヒは、DDRが「模範的市民に与えたすべてのもの」を所有していた。ところが西ドイツにいる親戚を訪ねたヘードリッヒ夫妻は、「DDR国家によってこれ以上ひどくは考えられないようなやり方でペテンにかけられていたことをその時に知

った」。ハンガリーを訪れたさい、彼はDDR脱出について援助を得るため、西ドイツ大使館に電話でコンタクトをとった。実はその電話が盗聴されており、夫婦共にシュタージに逮捕される。拘置所に送られた彼は、「夜は板張りのベッドに背を向け、顔をドアに向けた形で10時から翌朝6時まで就寝しなければならず、10分ごとに見回りが光を当てた」。ところがそこでベルリンの壁が崩壊する。夫妻は相次いで釈放されたが、妻は神経に異常を来すほど、精神的・肉体的に過酷な扱いを受けていた。89年12月になって彼らは西ドイツに移住したが、その後も健康だけは取り戻せていないという。

著者は、彼のような高い地位に昇った人間でさえ、DDRと距離を置こうとしていた点に注目すべきだとする。また、壁崩壊の直前までシュタージの抑圧が続いていた事実、しかし12月には無力化していたという事実は、「ベルリンの壁崩壊からシュタージ解体までの激動を凝縮して」示している事例であると評価している。

第7章「マックス・ヴォルフとドイツ現代史」が扱うのは、これまでとは逆に、取り締まる側だったシュタージのリーダーの個人史である。ヴォルフは、フランス軍がルールを占領した1923年に生まれる。ユダヤ系で父が共産党員であったことから、ヒトラー政権掌握後には一家はソ連へ亡命した。帰国後には、シュタージの幹部となり、ブランド首相の秘書として有名なギョームをスパイに送り込むなど、東西の諜報戦の中心に位置することになる。ところが彼は86年に突然引退する。89年に出版された最初の著作で、ヴォルフはベレストロイカを支持する姿勢を示し、DDR改革派の集会にも顔を見せるようになる。ただし、11月4日のベルリンで50万人の市民を前にシュタージの活動の正当性を主張したとき、彼は「過去の人」になった。そればかりか、統一後にはスパイ活動の容疑で収監されることになる。結局刑は取り消され、彼はその後も執筆活動を続けたが、DDRを擁護する人々からは共感が寄せられることも多かったという。

ヴォルフには、「ユダヤ系、共産主義者、スパイ、抑圧の担い手という四つの顔が認められる」のであって、彼の人生は「ドイツ現代史が凝縮していると

いっても過言ではない」との評価がなされている。

第8章「DDRにおける外国人労働者と外国人政策」はやや補論的内容といえるが、ベトナム人を中心とする外国人労働者の実態について、ドイツ統一後の排外暴力との関連性も視野に入れながら考察されている。

人口流出国であったDDRは、とくに80年代にはベトナム人を最大勢力とする外国人を受け入れた。彼らは単純労働に従事しながらも、多くは良好な勤務態度をとっていたという。賃金や社会保障の面でDDR国民と平等な扱いを受けられたためであったが、彼らの賃金の12%は、「祖国ベトナムの建設と防衛のため」として天引きされ、ベトナム政府の国庫に送られていた。DDR政府が情報を秘匿していたために、国民は、外国人は西側への自由出国や通貨の入手が容易であると信じており、外国人に対する羨望と嫉妬の感情がはびこる温床が作り出されていた。彼らは母国へ消費財を送付したが、そのことも「消費財を買いあさり品不足を引き起こしている元凶」という国民のイメージを形成した。このほか、「個人の自律性を押し潰す社会の硬直性に反抗する若者たちのプロテスト文化」からネオナチ的グループが登場したこと、「過去の克服」が不十分で民族主義的な傾向について深く考える機会が少なかったことなども、外国人排斥的な思考が浸潤する土壌を提供したという。「彼らを蔑視することによって自己の存在感を確かめたり、その競争を排除して自分を守ろうとする外国人排斥感情の構造」は統一後も続いているとされる。

終章「論争の中の東ドイツ」では、まず東ドイツ地域でオスタルギーが広がり、DDRに対する肯定的な見方が近年目立つようになってきている状況に対して、次のような批判がなされる。「繰り返し確認する必要があるのは、DDRが人権などを抑圧するSEDの独裁体制だったという冷厳な基本的事実である。本書で論じてきたように、現実のDDRには自国民を外に出さないコンクリートの壁や内部国境の鉄条網が厳重な監視のもとに張り巡らされ、しかもそれが国家存立の支柱となるという稀に見る支配構造が存在していたのである。そればかりではない。そうした国家を支えるためにシュタージを中心に国内には社会を覆い尽くす監視網と厳しい抑圧体制が構築され、一般市民を私生活へ

の逃避に追いやっていたのである」。続いて、DDRを「不法国家」とするかどうかに関わる政治的論争が追跡され、最後に今一度従来の研究におけるDDRの位置づけが考察される。フルブロックのいう二つの語り口「権力と抑圧の語り口」、「完全に普通の生活という語り口」のうち、ドイツ統一後に優勢だった前者から、近年は日常史に関心が移ることで後者の側が強くなり、さらに再度両者のバランスのとれた研究の必要性が叫ばれるようになっている。そして、著者は、「研究蓄積に基づいて、正負のどちらにも偏らないDDRの実像が遠からず結ばれる日が待たれる」として本書を結ぶ。

II 本書の意義とDDRの評価を巡る論点

本書の意義としては、もちろん、我が国ではこれまで十分な実証的解明が進められてこなかったシュタージの実態やその犠牲者の生身の人間像について、広範な資料や文献の利用によって、かつ一方的糾弾や偏見の混ざらない冷静な視野から描き出して見せたという点が第一に挙げられる。我が国におけるDDRに関する理解を、格段に深めたことは疑いようがない。

第二に、全体にわたって、「もはやほとんど誰も見渡せない研究と記憶の領域」(J.コッカ)とされるような数に及ぶ、ドイツにおける過去20年間のDDR史研究が涉獵され、丹念に追跡されており、我が国のDDR研究書においては他に類を見ないものである。これまでのDDR史研究の動向を的確に把握するためには、まずは最初に参照されるべき業績となったといえよう。

第三に、近年のドイツにおいて、一般にDDRがどのように評価されようとしているかに関する動向を把握し、それを問題意識の背景に置きながら検討を進めている点が挙げられる。我が国でのDDRに対する関心の薄さとは異なり、ドイツにおいては自国史の一部であるDDR史には学界・政界でもメディアでも大きな関心が寄せられてきた。それは、ドイツ統一直後の一方的な断罪というニュアンスから、近年では「DDRの肯定的部分」への理解も進み、一種のDDR回顧ブームという様相も呈している。そうしたなかで、シュタージの行

為が相対化される雰囲気すら生じていることに著者は警鐘を発する。「DDRはそんなにひどくなかったとして過去を書き換え、DDR解明に対する幕引きをしようとする」傾向に対して、本書は批判的に立ち向かい、改めて「シュタージの犯罪」を冷静に問い直そうとしている。その批判は、著者自身によるDDRの実証的分析に基づいているだけに、いっそう鋭いものとなり得ている。こうして本書は、DDR社会の客観的理解に寄与しているのはもちろんのこと、現代ドイツを理解するうえでも貴重な貢献を果たす書だといえる（たとえば1章のビルトラー序や5章でのリンゼ賞にまつわる議論、終章での「不法国家論争」の追跡などからは、近年のドイツ政治の動向をかなり良く把握することができる）。

本書の意義の第四として挙げておきたいのは、DDRの暗部であるシュタージを検討対象としながら、それだけではDDRを語ることはできないとして、その光の側面についても繰り返し言及し、バランスのとれた評価を下すことに重ね重ね配慮している著者の学問的態度である。そしてこの態度は、「DDRの実像」を描くにあたって、バランスの良い像を提供することに成功しているといえる。なお、こうした態度は、決して著者がDDR体制を高く評価するがゆえに生じているものではないことを改めて確認しておきたい。本書は、むしろDDR体制に対して批判的な内容であり、著者の姿勢は、純粹に学問対象に対する多面的な視野からの分析の必要性を認識することから来ているものである。このような著者の姿勢からは、社会学者として学すべき点が多い。ただ、この点に関して評者が若干危惧するのは、著者のこうした姿勢にもかかわらず、本書から「シュタージの犯罪」という側面だけが一方的に取り上げられることになってしまわないかという点である。著者は、ドイツにおける、とするとDDRを美化しようとする傾向に対する警鐘を発しつつ本書を執筆しているが、我が国では美化どころか「シュタージに支配された全体主義体制」という先入観の時点で、DDRに対する関心が止まったままであるという感があるからである。本書のバランスに配慮した叙述が、十分に読み込まれることを願いたい。

こうした意義を確認したうえで、以下では若干の論点について、評者から問

題提起をしておきたい。

第一に、「くほみのある社会」というDDR社会の特徴付けについてである。著者は、第3章において、「普通の市民にとってはDDRには自分の身の安全を確保する術がなかった」からとして、市民は「無数に存在した小さくて目につかないくほみ」＝「自分の小さな殻」に閉じこもって暮らしていたとしている。だが、同じ章には、フルブロックが以下の点を強調しているとの引用もなされる。1960年代後半以降になると「社会的、政治的にいささかも活動的でない市民たちもまた口を閉ざしていることは必要とされなくなった」(P.131)。評者は、拙著において、シュタージ研究者のヒュルトッゲンから、「企業にどれくらいのシュタージがいたか、我々は知らなかった。もし誰かが我々の中に混じってのぞき見をしていたのだとしても、まったく気がつかなかった」という東独労働者の回顧や、「70～80年代になると、人々は、してはいけないことと、ここまではしても良いということを識別しており、労働者の間には全般に『落ち着き』が生じていた」という指摘を引用したことがある(拙著『もう一つの経済システムー東ドイツ計画経済下の企業と労働者』北海道大学出版会、2010年、266頁)。これらの指摘と、著者の「普通の市民にとってはDDRには自分の身の安全を確保する術がなかった」という指摘は、やや矛盾するものではないだろうか。著者は「普通の市民の間ではシュタージの影は感じとられてはいても正体がつかめなかったから、シュタージがどれほどの威圧感を与えていたのかは確認が難しい」(P.103)とも述べている。だとすると、終章で強調されているような「社会を覆い尽くす監視網」が構築されていたという評価はやや誇張されすぎのように感じられ、少なくとも70年代以降のDDR社会において、市民が「自分の身の安全を確保する術がなかった」とは考えづらいように思われる。彼らは、シュタージの存在を恐れはしながらも、身を守る術を自分なりに会得していたのである。「くほみに閉じこもっていた」、「私生活に逃避していた」という市民像は、果たして著者の意図するところを的確に表しているといえるのだろうか。

「温もりのある人間関係」についても、企業の末端組織であった作業班を中

心に存在した濃密な人々のつながりや、斎藤哲氏が指摘したように消費財を買うために行列を作っている人々同士の関係においても確認ができるものであり、「閉じこもった」私生活の空間でのみ存在したものではなかった。「温もりのある人間関係」と「くほみのある社会」という二つの像は、この点からも、結びつけることが難しいように思われる。

本書は、「普通の市民」を対象にしているとされるが、なかでも「シュタージの犯罪」の被害を受けた市民にスポットライトが当てられているがゆえに、ヤグーシュの言う「市民の10%以下」、つまり普通の市民の中の一部を対象としたものである。それゆえ、残りの「90%以上の市民」については、著者はそこへも繰り返し言及し、またシュタージに対する恐れから「人々の自己抑制が生まれ、体制が安定」という指摘はなされるが、直接光を当てて考察しているわけではない。この点からも、「社会を覆い尽くす監視網」が構築されていたとの評価は気になるものである。「社会を覆い尽くす」というからには、「90%以上の市民」とシュタージの実証しておくことが欠かせない作業であろうが、本書ではその作業は果たされていない。繰り返しになるが、著者は、普通の市民の間で「シュタージがどれほどの威圧感を与えていたのかは確認が難しい」とする。だが、「90%以上」の部分の確認作業が出来る限り必要とされるのであって、その作業がまた「DDRの実像」の解明にとって必要とされるものであるように思われる。著者も言うように「国民の日常と体験が決して一様ではなかった」こと、「普通の市民」にも2種類があったということを確認したうえで、分けて検討することが求められるのではないだろうか。

著者は、従来の日常史研究について、「日常史では支配構造に重点が置かれず、かつまた肯定的側面と否定的側面にいわば価値中立的に接近する方法がとられるところから、権力と抑圧の実態解明を優先課題とする立場には後ろ向きだと受け取られるのは避けられなかった」(P.315)として、「日常史による独裁の希釈」を批判的に整理している。だが、「90%の市民」の日常に「価値中立的に接近」すると、そこには「独裁」という視点からでは理解できないような実態が広がっているということも確認しておく必要があるのではないか(こ

の点は、評者の経験から来る実感でもある)。日常史は、著者が言うように「価値中立的」に事実に接近しているのであって、「独裁の希釈」を目指して事実を選択的に描いているわけではないからである。著者は、支配と日常の二つの側面を見据えるための方法として、「支配構造を視野に入れつつ、しかし支配構造自体ではなく、その底辺に生きた生身の人間に光を当てる方法」(P.315)、つまりシュタージとその被害を受けた人々を対象とする方法をとっている。この方法は、「市民の10%以下」を対象にする限りでは、二つの側面を同時に把握することに成功している。だが、「90%以上の市民」、つまりシュタージの被害を受けなかった人々とシュタージの関係がいかなるものだったのかを解明するにあたって、この手法をいかに有効に使用できるかが問われるところであって、独裁の影がイメージされるほどに大きくはない「90%以上の市民」の日常を、独裁の視点からどのように理解するかは方法論的にも難しい問題を投げかけているように思われる。

もちろん、シュタージのような支配・独裁の視点からDDRを歴史的に位置づける作業は、本書の業績を踏まえたうえで今後も冷静に続けられていく必要があるが、DDR社会を検討対象とする意義としては、本書においてバランスよく目が配られている「温もりのある人間関係」の方に、より面白味があるのではないだろうか。これは、現代資本主義社会においては失われつつあるものであるように思われるからである。「温もりのある人間関係」は、ナチ体制下の日常生活とどのように比較考察することができるのか（これは必然的に独裁とは何かを追求する作業にもつながっていくと考えられる）、あるいはそれは、一党独裁で周囲を壁に囲まれた状況下、計画経済下であったからこそ存続可能であったのか、もしくは他の条件下、経済発展状態の下でも存在可能なのかどうかといった視点でさらに議論を深めていくことは、ドイツ史や現代ドイツの問題、今後の我々の社会のあり方を考えていくにあたって、一つの示唆を投げかけてくれるものであるように期待される。そして、ここにまた、DDR社会主義体制の実証的研究を続けていくことの一つの意義があるように考えられるのである。

著者は、今後の研究の継続に関しては、「時間的体力的に余裕が乏しくなっている」としながらも、「一步でも東ドイツ研究を前進させたい」との決意をもって本書を結んでいる。多分に謙遜が含まれるにしろ著者自ら本書を「序論でしかない」と位置づけているからには、今後の「本論」を期待したいというのが、評者のみならず、我が国ドイツ研究者の総意であろう。著者によるDDR研究の完成を待ち望みたい。

[木鐸社、2010年、332頁]